慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代大学生の「まじめ」観に関する考察： 「家庭での生活態度」をもとにした実証的分析
Sub Title	The consideration about a sense of "majime" in contemporary college students: substantial analysis based on the items of "modus vivendi at home"
Author	小澤, 昌之(Ozawa, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2006
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.63 (2006.) ,p.49- 62
JaLC DOI	
Abstract	For a college student in hope of the acquisition of a teaching certificate, I consider that they take an action strategy based on a sense of "Majime (seriousness)" by analyzing an item about "modus vivendi at home," which made from the degree of a commitment to home. According to the result, college students who replied this questionnaire were a tendency to have the strong ties between influence of family life and adaptation to a schoo. Although, answer distribution in them dispersed in an item to ask studies=position achievement intention, this result might imply that "consummatory of school" intention had an influence on outlook on "Majime" of them. Therefore, this research appeared that they promoted adaptation to a school by changing studies=position achievement intention.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000063-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代大学生の「まじめ」観に関する考察

――「家庭での生活態度」をもとにした実証的分析――

The Consideration about a Sense of "Majime" in Contemporary College Students:

Substantial Analysis Based on the Items of "Modus Vivendi at Home"

小　澤　昌　之*
Masayuki Ozawa

For a college student in hope of the acquisition of a teaching certificate, I consider that they take an action strategy based on a sense of "Majime (seriousness)" by analyzing an item about "modus vivendi at home," which made from the degree of a commitment to home. According to the result, college students who replied this questionnaire were a tendency to have the strong ties between influence of family life and adaptation to a school. Although, answer distribution in them dispersed in an item to ask studies＝position achievement intention, this result might imply that "consummatory of school" intention had an influence on outlook on "Majime" of them. Therefore, this research appeared that they promoted adaptation to a school by changing studies＝position achievement intention.

1. はじめに

現代社会における若者を捉える視点が変容を見せる中で，近年，大学生における雇用動向が注目を集めている。2007年度の大学入試において，志願者と入学者数が数値上釣り合う「大学全入時代」が到来すると推測されている中で，大企業を中心に景気回復路線の広まりを反映して大学生の新卒採用数が軒並み上昇を見せている一方，新卒後定職につかないフリーターやアルバイトをする若者が200万人を突破し，若者の雇用機会に二極分化が生じているのも事実である。つまり，「いい大学を出ていい会社に入る」ことが自明性を有していた時代は終わり，学歴や成績などの学校的価値を自ら高めていくだけでなく，コミュニケーション能力や人間関係スキルなどの学校的価値以外の能力を高め，雇用に伴うリスクを軽減する必要性に迫られているということを意味しているのである。

ただ，価値観の多様化や個性化が進む一方，大学生を取り巻く状況はそれらと異なる様相を呈している。伊藤(1999, 2002)は，かつて「大学のレジャーランド論」が囁かれていた1970年代においては，

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻（教育社会学）

大人たちはサークル活動や異性交際に明け暮れる大学生を「望ましくない」ものだと疎んじてきたが，現在の大学生は，主体的に学ぶ意欲もないがボランティアに熱心に参加するなど，「学校が与え，課すものを依存的，他律的にこなす」(伊藤 2002: 92) 存在となっていると指摘する。伊藤は，こうした現象を「生徒化」という表現を用いているが，その背景にあるのは，ほぼ毎日大学へ行き授業への満足度も良くもなく悪くもないが，大学教育を受ける目的や大学で得た知識が何に役立つのかについて明確に見えておらず，それでも大学への期待が大きい学生の増加を暗に指摘しているといえる。

その一方で，高学歴化の進行に伴い親と生活を共にする期間が長くなるとともに，教育機関に通学する期間も長くなっていった。溝上 (2004) は，日本における高学歴化が進行した時期において，モラトリアム期が想定していたアイデンティティ形成過程が転機を迎え，本来はアイデンティティ確立の手段であり過渡期であったモラトリアム期は，それ自体が合理化（自己目的化）され，居心地の良くなったモラトリアム期にいつまでも居続けようとするようになったと指摘している。その一例として，関西圏の大学生を対象とした調査から，「家庭の内外で親密なコミュニケーションをとりながら，生涯を通じて親密な関係をとろうとする」友達親子が男女を問わず増加していることを指摘した中西 (2004) の報告が挙げられる。報告によれば，大学生である子どもの感じ方には，母親の過保護な行動や態度に圧迫感を感じる否定的評価が男女ともに目立つが，女子には母親を性役割モデルとして評価する傾向が現れている（中西 2004: 60–69)。

高校・大学進学率の安定化が進んだ 1990 年代以降，社会化のエージェントとしての学校の機能が低下し，メディアや消費文化へのコミットが若者の意識形成に影響力を持つようになっている。また「いい会社で働くこと」や「いい学校に行くこと」などのように，予期的社会化における具体的な目標が拡散している状況であるものの，それらへ動機づけるものの欠乏は彼らの人生にとって不利益を蒙るものではなく，むしろ「自分探し」のように，抽象的かつ不可視的な目標が課されていることで，目標自体が見えにくいものとなっている（伊藤 2002)。ただ現代の若者の置かれている状況を身近な視点で考えれば，核家族の成員が子どもの社会化に与える影響は大きく，マスメディア情報へのコミットメントも，養育をする親などによるスクリーニング作用に左右されているといえる（渡辺 1989)。学校教育と社会との関係でいえば，現代社会における社会階層の移動が固定化する兆しを見せていることで，あえて資源配分のための獲得競争に勝ち抜くための努力をしなくなった傾向は現れているものの，依然として学業成績が社会的選抜に影響を与えている上に，業績主義に基づく学校適応モデルは現在でも有効に存続している（堀 2000)。

ところで，高度成長期以降に一般化した「親が子どもを育てることに責任を持つ」〈教育する〉家族は，家で良い子として扱われている子どもは，学校でも良い生徒として扱われるようになったこと，つまり学校と家庭での教育が一致していることにより，「完璧な子ども (perfect child)」を目指すことが子どもにとっての目標となった（広田 1999)。その「まじめ」が形成されていく要因において，仮に家庭（良い子)→学校（良い生徒)→大学生活（まじめな学生）へと連なる「完璧な子ども」図式が成立しているとすれば，教育システムや個人を取り巻く環境が変容し，かつ社会化のエージェントが細分化・多様化している現代社会でも，主たる社会化のエージェントとなっている家族の相互作用は，大学生の学習態度や「まじめ」意識の変化を分析する上で重要なものだといえる。したがって本稿では，教員免許の取得を希望する大学生を対象に，「家庭での生活態度」に関わる項目をもとに分析を行うことで，家庭へのコミットメントの程度をもとにして「まじめ」な学習態度をとる大学生に潜む行動戦略を考察し，現代

大学生の「まじめ」観を検討する。

2. 問題の所在

最初に，本稿の研究課題について分析を試みるにあたって，研究に必要な視点を提示する。例えば，「まじめ」な大学生は授業態度もまじめで，家庭での生活態度もよいという傾向が想定されがちである。しかし，アルバイトやサークル活動，就職活動など，大学生を捉える視点により複雑な要因がからみ合っていると考えられる。近年大学生や高校生などのアルバイトの日常生活の時間に占める割合が高まったことで，結果的にアルバイトでの就業経験が卒業後フリーターとなる敷居を低くしている（小杉 2003）という指摘があるように，置かれている状況や個人的志向により「まじめ」な学生の性質が変わってくるのは事実である。そこで，大学生が高校以前に影響を受けた学校文化に関する議論，および学校教育と現在の家族関係との関連性に関する先行研究について考察しながら，養育期に形成された「完璧な子ども」図式の延長線上において，家庭へのコミットメントの程度が「まじめ」な学習態度をとる大学生に与える影響について検討を行う。

まず，大学生が高校以前に影響を受けた学校文化に関する議論について注目すべき点は，「学業＝地位達成志向」である。学業＝地位達成志向とは，「勉強→良い学校→良い仕事→良い生活」という教育神話のように，学業成績や偏差値などの学校的価値を職業の地位達成志向のための手段的有効性から評価する見方である。簡潔に言えば，努力によって成績を上がれば，進学や就職においてその成果が報われ，一方で成績がうまく上がらなければ，自分の努力不足だと納得できるということを示しており，業績主義に基づいて日本の教育制度における公正・平等な社会的選抜制度が保障している根拠だといえる[1]。

この納得の構造の背景にあるのは，教育社会学で広く議論されているトラッキングと呼ばれる概念である。トラッキングとは，端的に言えば，「学校ランクによる進路選択の制約など法制的には認められていないにもかかわらず，実際にどのランクの学校に入ったかによって生徒の将来的な地位達成が大きく左右されてしまう傾向」（室井・田中 2003: 72）である。堀 (2000) は，トラッキングはアスピレーションの冷却＝抑圧という文化装置として機能しており，学校での成績や教師のとる姿勢によって学校に適応できるか否かが変容する「生徒文化の分化」（耳塚 1980）が，学校格差によって正当化される根拠となっているとしている。つまり，「反学校文化」にいる生徒は学校格差を認識することによって，「挫折させられた欲望」として欲求不満（逸脱行動の発現）につながる一方で，「向学校文化」にいる生徒は教育期待によってアスピレーションが加熱されるように，生徒本人の学力や学校格差が学習へのアスピレーションが帰属させるという明確な図式を提示している[2]。

しかし，1992 年をピークに高校や大学の受験者が少子化の影響で逓減したことによって受験競争の緩和が進んだ上，1990 年代以降の学校は個性化教育の潮流の中で，「居心地の良い学校」を目指そうとする「学校のコンサマトリー化」が図られたことによって，「生徒文化の分化」を規定する要因となっていた地位欲求不満説における「逸脱文化」の規定力が弱まった。それに伴って，「逸脱文化へのコミット＝低学力」「向学校文化への適応＝高学力」というような一面的な図式では記述できないような事態が現出している（大多和 2000，伊藤 2002）。それは，ある意味で学業＝地位達成志向の揺らぎというべき事態であるが，学歴＝地位達成志向の揺らぎにもメリットがあり，生徒の〈選択的コミットメント〉欲求に対して学校や教師などが即時的に対応できることにより，以前よりも極端な逸脱行動をする生徒が少なくなったり，校則という強行規定がなくとも教師―生徒関係の暗黙の了解，あるいは話し合いによっ

て一定の校則の逸脱あるいは変更を認めるといったように，生徒たちの反動・逸脱行動形成のプロセスを減退させることに役立っているとされている。

さらに，その流れの一例が「大学生の生徒化」に結びついていると考えられる。伊藤 (1999) が私立大学 7 校の学生を対象に行った質問紙調査の結果によれば，生徒化適応群は高校時代から出席率が高く，学校に適応している一方，アルバイトやサークル活動に積極的に関与することによって生徒化が弱まる傾向が出ている。

それは，大多和 (2000) は，1980 年代から 1990 年代の約 20 年間にわたる変化において，学校という場所は「不満もあるがはりあいもある場所」から，「不満もないしはりあいのない場所」となり，生活世界に占める学校の役割が低下していることを示唆したことと対応している。したがって，学校の役割は様々な影響を受けることで，若者の生活世界において相対的に低下する一方で，学校的価値に適応するかの可否ではなく学校における人間関係の位置づけによって「生徒化」に適応するかが決まることになると考えられる。

一方，学校教育と家族関係との関連性に関する先行研究については，様々なところで指摘がなされている。工藤 (2001) によれば，相談ネットワークに「家族・親族」が含む場合と含まない場合で，違った学校文化を身につけると記述している。「家族・親族」が相談ネットワークに含まれる場合は，「関係の強い他者」（パーソナル・ネットワークが強く交わる親しい他者）は「家族・親族」となり，「関係の強い他者」に相談する生徒ほど高校生に適応的な傾向を示す一方，「関係の弱い他者」に相談する生徒ほど高校生活に適応的な意識を有さない傾向がある。また，「家族・親族」が相談ネットワークに含まれない場合は，学校での友達関係が「関係の強い他者」の中心となり，「関係の強い他者」に相談する生徒ほど規範に同調的な意識を有する傾向がある一方，「関係の弱い他者」に相談する生徒ほど自律的な意識を有する傾向があることを示した。工藤は，「家族・親族」と友達関係はともに，社会化において一定の役割を有していることを示した上で，調査対象となった高校 3 年生は社会化において重要な時期であり，各個人が自分を中心として同一空間の中にある「重要な他者」を取捨選択していると指摘している。

また，親子関係について本田 (2005) は，次のような興味深い結果を導き出している[3]。本田は親子関係に関係する調査項目として，「家族コミュニケーション」と「親の教育期待」の二つを提示し，1989 年と 2001 年の時間軸で比較を行っている。「家族コミュニケーション」については，親との会話で成績や学校での授業の頻度，将来の仕事のことが減少する一方，悩み事や趣味，友達のことを話す頻度が増えている。「親の教育期待」については，男女・学年別ともに親からの期待を感じている子どもが減少している。双方の調査項目の結果について本田は以下の指摘を行っている。前者は親子関係の密度自体にあまり変化は見られないが，教育や職業など，地位達成や社会の現実に関わる話題の比重が低下し，代わって個人的な興味や関心に関わる内容の比重が相対的に増大していると分析している。後者については，1990 年代以降の景気の長期低迷により，地位達成の見込みが見えにくくなったことで，子どもが感じる期待は明らかに希薄になっていると推測している。ただ，片瀬 (2005) が指摘するように，家族関係は親の社会的地位や子どもの成績によって左右され，特に双方の指標が高ければ親からの期待を感じる比率が高まるという，従来から指摘されている知見もある程度影響していると考えられる。

以上のことから，本稿では次の 2 点について検討を行う。1 点目は，家庭での生活態度が大学生の意識形成に与える影響である。これは，具体的に家庭での生活態度の項目を元に分析を進めることで，大学生の「まじめ」さが「完璧な子ども」図式の延長線上に形成されているか，もしくは他の要因がから

んでいるのかを検討することである。2点目は，旧来の「まじめ」観を支えてきた学業＝地位達成志向が，現代の若者に与える影響力の低下の可能性について検討することである。1990年代以降，個性化教育や受験競争の緩和，学習指導要領が進める学習量の軽減方針に代表されるように，学業＝地位達成志向を結びつけるアスピレーションの縮小・消失により，「向学校」の学習態度そのものの意義が問われている。そこで，大学生の持つ学業＝地位達成志向を分析することは，「大学生の生徒化」の背景を探るとともに，「向学校＝まじめ」といった，学校文化における従来の固定概念 (stereotype) と現代の若者の姿とのギャップを描写する上で有益なものである。

3. 研究方法

3.1 分析データ

最初に対象とする調査は，筆者が修士論文のための調査の一環として，2005年5〜7月に実施した調査（有効回答総数：1,235人）を分析に用いる。本調査は私立大学2校（A大学，C大学）および国立大学1校（B大学）の教員免許状の取得に関わる授業を履修する大学生を対象に行われ，主に大学1･2年次配当科目を受講する学生に授業時間の一部を利用して調査に参加していただいた。質問内容は高校時代の生活意識や出身高校，友人関係や大学での生活，教育問題に対する視点など多岐にわたっている[4)]。

3.2 使用する変数

本稿では質問項目のうち，家庭での生活態度が大学生の意識形成に与える影響と，学業＝地位達成志向と現代の若者との関係性の二つの観点を調べる観点から，主として本調査の項目のうち，家庭生活と規範意識に関する項目をもとに検討を行う。両項目に注目した理由は，前者は本稿の研究目的である，〈家庭（良い子）→学校（良い生徒）→「まじめ」な大学生という連関関係〉のあり方を調べるのに適していること，後者は大学生となった現在の状況に即して回答していることから，「まじめ」さを判断する材料として適しているからである。そこで，両項目の回答傾向について見た上で，詳細な分析を進めていきたい。

それぞれの設問項目について見ていくと，家族生活に関しては，表1にあるように「1当てはまる」の流れを見ると，どの調査項目においても「1当てはまる」と回答した人が過半数を超えていることから，家族と比較的親密な関係を形成している大学生が多いということが読み取れる。ただし，「家族内でお互いの悩みを打ち明けられる」のように，精神的自立に関わる項目になると「1当てはまる」と回答する人が，他の項目に比べて大幅に減少していることから，この項目が家族との親密な関係を築く上で「深い/

表1　家庭生活に関する項目の単純集計表（単位：選択科目；%，合計；回答人数）

	1	2	3	4	合計
F1　家族の仲は良い	64.5	24.0	7.4	3.2	1224
F2　両親のことを尊敬している	49.4	33.8	11.8	4.2	1225
F3　親には外出先であったことを報告する	23.4	37.2	27.0	11.5	1225
F4　家族内でお互いの悩みを打ち明けられる	16.8	35.7	30.8	15.8	1223

注）項目：1. 当てはまる。2. 少し当てはまる。3. あまり当てはまらない。4. 全く当てはまらない。

表 2　規範意識に関係する項目の単純集計表（単位：選択項目；%，合計；回答人数）

	1	2	3	4	合計
N1　授業中や電車，バスの車内で携帯電話を操作すること	10.2	32.4	34.8	21.5	1222
N2　友達と一緒にいるときに，歩きタバコやごみのポイ捨てをする	72.2	18.5	6.2	2.4	1227
N3　カンニングをすること	69.2	19.7	5.7	4.6	1226
N4　電車やお店の入り口付近で地べたに座る	65.2	20.2	9.7	4.2	1227
N5　自分が知りたいという目的で他人のプライバシーに介入する	55.3	35.1	7.7	1.3	1227
N6　レストランや電車内など，公衆の面前で化粧をすること	50.5	25.2	15.6	7.0	1215

注）項目：1. 抵抗がある。2. ある程度抵抗がある。3. あまり抵抗がない。4. 抵抗がない。

浅い」の程度を決定づける分水嶺となっていることが考えられる。

次に，規範意識に関する項目は表 2 の 6 項目である。この項目は先行文献（友枝・鈴木編 2003，片瀬編 2001）を参考に，日常生活で社会規範に対する個人の価値観が問われる場面を想定して作成している。主な特徴は，①一般的に規範意識が問われる項目に対する抵抗感が大きい，②コミュニケーションや人間関係の形成に関わりのある項目では抵抗感が小さい，という 2 点が見られた。日常生活において規範意識が問われる場面では，軒並み「抵抗がある」と回答する人が過半数を超えているので，回答者である大学生は，一般的に社会的なルールが要請されている場面では，適応的な態度をとっていることが推測できる。ただ，「授業中や電車，バスの車内で携帯電話を操作すること」のように，相手とのコミュニケーションが周囲に対する配慮よりも優先される項目は，「抵抗がある」と回答する人が非常に少なくなるように，時と場合に応じて周囲に対する配慮を使い分けていることが伺われることから，「まじめ」のあり方の変容を見る上で注目すべきものだといえる。

4. 分　　析

4.1　分析方法

本稿では，大学生の意識形成が家庭での生活態度に及ぼす影響，および現代の若者と学業＝地位達成志向との関係性について考察を進めるため，他の関係する項目との比較をしやすくするために，家庭生活と規範意識に関する項目の双方を尺度化する[5]。確かに，前節では家族との仲が良く，規範意識も比較的高い回答者が多いという傾向が現れたものの，それが即時に「大学生の生徒化」を規定することにはならない。それは，本調査は教員免許の取得を希望していることで，比較的学校文化に適応している学生が多いということが予測されるからであり，「まじめ」な学生が多いという事実は確認できるが，「学校が与え，課すものを依存的，他律的にこなす」という生徒化の要件を詳細に検討できていないことになる。尺度化を行うメリットとしては，関係する項目を調査項目に入れて回答させているので，項目に関する傾向をより可視的に示しやすくするだけでなく，家庭へのコミットメントが大学生の学習態度の「まじめ」さの背景を詳細に検討できることを重視した。

表 3 は，双方の調査項目を尺度化したものの回答分布である。家庭生活尺度は表 1 にある 4 項目，規範意識尺度は表 2 にある 6 項目について，回答項目を数値化して合計を出し，回答状況に応じて低位群・中位群・高位群の 3 ランクに分類した[6]。具体的にこの尺度を構成する回答者の学習態度を検討す

表3　家庭生活尺度および規範意識尺度の回答分布

	低位群	中位群	高位群	合計
家庭生活尺度	127(10.3)	680(55.1)	415(33.6)	1222
規範意識尺度	75(6.1)	764(61.9)	371(30.0)	1210

表4　家庭生活尺度および規範意識尺度のプロフィールデータ

①		上の方	中の上	中程度	中の下	下の方	検定
家庭生活尺度	低位群	23(18.1)	39(30.7)	26(20.5)	20(15.7)	19(15.0)	***
	中位群	158(23.4)	198(29.3)	157(23.2)	79(11.7)	84(12.4)	
	高位群	132(32.0)	139(33.7)	78(18.9)	37(9.0)	26(6.3)	
規範意識尺度	低位群	14(18.7)	29(38.7)	12(16.0)	10(13.3)	10(13.3)	+
	中位群	189(24.8)	224(29.4)	168(22.0)	91(11.9)	90(11.8)	
	高位群	105(28.7)	119(32.5)	83(22.7)	33(9.0)	26(7.1)	

②		授業	自主勉強	学習塾等
家庭生活尺度	低位群	58(46.4)	43(34.7)	55(44.4)
	中位群	379(56.4)	231(34.8)	314(47.2)
	高位群	282(68.8)	168(41.5)	182(45.0)
	検定	***	+	*n.s.*
規範意識尺度	低位群	32(42.7)	21(28.4)	30(40.5)
	中位群	409(54.2)	256(34.3)	354(47.3)
	高位群	271(73.6)	160(44.3)	164(45.3)
	検定	***	**	*n.s.*

注）1. 各表の単位：括弧内の数字は%，括弧外の数字は回答人数（人）を表す。2. 表中のデータはいずれも各尺度とのクロス集計であり，上の表の①は高校時代の成績，②は高校時代に主に行っていた学習方法。3. 検定については以下のとおり。*** $p<0.001$　** $p<0.01$　* $p<0.05$　+ $p<0.1$　*n.s.*　no significant。4. ②の質問項目は，「高校に通っていたときあなたは日常，どのような学習形態をとっていましたか。次の項目のうち当てはまる番号に一つ○をつけてください。」であり，「授業の宿題，予習・復習（授業）」「学校の授業外の自主的学習（自主勉強）」「学習塾・予備校等への通学（学習塾等）」各項目に，「はい」「いいえ」の選択肢のうち「はい」と回答した人のデータを掲載している。

るために，高校時代の学習形態および成績との間でクロス集計を行ったのが表4である。高校時代の成績との関係については，統計的に有意な家庭生活尺度の場合も，弱い統計的有意性を示した規範意識尺度の場合も共通して，各群に属する回答者も「中の上」と回答した人が一番多い上に，「上の方」と回答する人が「中程度」と回答した人との割合の差がさほど変わらず，「中の上」が頂点をとる山形の回答分布となっていた。一方高校時代の学習方法との関係では，有意差が見られない学習塾等を除き，低位群→高位群に進むに従い，「はい」と回答した割合が高くなる傾向が見られた。

このことから，回答者の大学生は学習塾や予備校よりも，授業や自主勉強などの自習を通して学力を高めることを重視すること，そして高校時代の成績に関しては，規範意識が高い人や家族関係が良好な人ほど，成績上位層が多くなる傾向が現れていることがわかる。これは，苅谷 (2001) が高校生を対象とした調査の中で，各学力階層間の学習時間の比較において，どの層とも約20年前のデータに比べて減

少した上に，「自分自身にいい感じを持つ」ことで成績や学力以外の代替的な価値観を形成するという，自己有能感の高さが，社会階層が低いほど学習時間の低下に結びついているという結果を示したことと軌を一にする。したがって，良い成績をとることや学習塾に通うこと自体を学習する上で重視すべき価値観と捉える学生が減少していることから，旧来の「まじめ」の価値観を支えてきた学業＝地位達成志向のもつ影響力が低下した代わりに，それ以外の価値観を学生たちは「まじめ」観において重視されている可能性がある。そこで次項以降では，旧来の「まじめ」観に代替する価値観の内容について，二つの視点から検討を行う。

4.2　家庭での生活態度が大学生の「まじめ」に与える影響

本項では家庭での生活態度が大学生の意識形成に与える影響を検討するために，家庭生活尺度と規範意識に関する項目との間でクロス分析を行う。その理由は，規範意識に関する項目は，「まじめ」さを測

表 5　家庭生活尺度と規範意識・校則に関する項目とのクロス分析

			家庭生活尺度			合計	検定
			低位群	中位群	高位群		
規範意識に関する項目	授業中や電車，バスの車内で，携帯電話を操作すること	抵抗がない	80(63.0)	395(58.6)	213(52.0)	688(56.8)	*
		抵抗がある	47(37.0)	279(41.4)	197(48.0)	523(43.2)	
	友だちと一緒にいるときに，歩きタバコやごみのポイ捨てをする	抵抗がない	17(13.4)	63(9.3)	25(6.1)	105(8.6)	*
		抵抗がある	110(86.6)	615(90.7)	385(93.9)	1110(91.4)	
	カンニングをすること	抵抗がない	21(16.5)	71(10.5)	34(8.3)	126(10.4)	*
		抵抗がある	106(83.5)	606(89.5)	376(91.7)	1088(89.6)	
	電車やお店の入り口付近で地べたに座る	抵抗がない	25(19.7)	98(14.5)	46(11.2)	169(13.9)	*
		抵抗がある	102(80.3)	580(85.5)	364(88.8)	1046(86.1)	
	自分が知りたいという目的で他人のプライバシーに介入する	抵抗がない	13(10.2)	74(10.9)	24(5.9)	111(9.1)	*
		抵抗がある	114(89.8)	604(89.1)	386(94.1)	1104(90.9)	
	レストランや電車内など，公衆の面前で化粧をすること	抵抗がない	36(28.6)	177(26.3)	65(16.0)	278(23.1)	***
		抵抗がある	90(71.4)	495(73.7)	341(84.0)	926(76.9)	
校則に関する項目	学校での集団生活で校則を守ることは当然のことだと思っていた	そう思わない	41(32.5)	126(18.8)	62(15.2)	229(19.0)	***
		そう思う	85(67.5)	546(81.3)	347(84.8)	978(81.0)	
	学校の校則には不要なものが多い	そう思わない	39(31.0)	251(37.4)	157(38.5)	447(37.1)	*n.s.*
		そう思う	87(69.0)	421(62.6)	251(61.5)	759(62.9)	
	私の学校の校則はあまり厳しくなく本人の自由に任せていたことが多かった	そう思わない	56(44.4)	316(47.0)	218(53.3)	590(48.8)	+
		そう思う	70(55.6)	357(53.0)	191(46.7)	618(51.2)	
	先生は校内の風紀を保つため，行き届いた校則に基づく指導を行うべきだ	そう思わない	74(58.7)	352(52.4)	178(43.6)	604(50.1)	**
		そう思う	52(41.3)	320(47.6)	230(56.4)	602(49.9)	

注）1. 各表の単位：括弧内の数字は%，括弧外の数字は回答人数（人）を表す。2. 検定については以下のとおり。***$p<0.001$　**$p<0.01$　*$p<0.05$　+$p<0.1$　*n.s.*　no significant。3. 表 5 で使われている規範意識に関する項目のうち，「抵抗がある」は「抵抗がある」と「ある程度抵抗がある」回答者の合計であり，「抵抗がない」は「あまり抵抗がない」と「抵抗がない」回答者の合計である。また，校則に関する項目は，「そう思う」は「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」回答者の合計であり，「そう思わない」は「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」回答者の合計である。

定する上でわかりやすい上に，クロス分析を試みることで双方間に潜在的に存在する傾向を把握できるからであり，「完璧な子ども」図式にあるような家族の仲が良いことが「まじめ」意識の形成に寄与しているのかを中心に考察を進める。

表5は家庭生活尺度と規範意識に関する項目とのクロス分析である。表5では校則に関する項目とのクロス分析も行っているが，高校時代における生活上のルールとして機能していた校則も，人々の行動を拘束する規範として働く点に注目して項目に追加した。まず，規範意識項目については，すべてが統計的有意性を満たしただけでなく，一部の項目に誤差はあるが低位群→高位群に進むに従い，「抵抗がない」と回答した人は減少し，「抵抗がある」と回答した人が増加する傾向が共通して見られた。また校則項目については，「学校での集団生活で校則を守ることは当然のことだと思っていた」「先生は校内の風紀を保つため，行き届いた校則に基づく指導を行うべきだ」のように，校則による行動統制機能を重視している項目は有意であったが，逆に「私の学校の校則はあまり厳しくなく本人の自由に任せていたことが多かった」「学校の校則には不要なものが多い」のように，「学校のコンサマトリー化」[7] を反映した項目は統計的有意性が弱い，または見られない傾向が現れた。また低位群→高位群移行時の回答分布でも傾向が異なり，前者は「そう思わない」が減少する代わりに「そう思う」が徐々に増加していくものの，後者は「そう思う」が減少する代わりに「そう思わない」が増加するように逆の結果となった。ただし，「学校のコンサマトリー化」を反映した項目に関して，各回答群とも「そう思う」と回答した人が過半数を超えたことから，通っていた高校の校風やレベルにも影響を受けていることが考えられる。

家庭での生活態度と大学生の「まじめ」意識には次のような関係が考えられる。まず家庭生活尺度の高さ，即ち家族との仲の良さの程度は，物事への配慮の程度を規定する規範意識を形成する上では重要な要素として機能していることが推測できる。また高校時代における学校のルールである校則に対する見方では，学校のコンサマトリー化を反映して，校則の持つ行動統制機能の縮減を示す結果が見られた一方，家族関係の良さや規範意識の高さが校則への適応に影響を及ぼすことがわかった。したがって，家族関係の良さは「まじめ」さの規定要因として機能しているものの，友達関係や高校時代の影響など，それ以外の要素がコンサマトリー的価値観への許容に影響を及ぼしていることが推測される。

4.3　大学生の学業＝地位達成志向の現在――高校時代の生活意識を手がかりに――

本項では，学業＝地位達成志向と現代の若者との関係性について検討を行うために，家庭生活尺度・規範意識尺度と高校時代の生活意識に関する項目との間でクロス分析を行う。高校時代の生活意識に関する項目は，日常生活や学習態度，学校外へのコミットメントなどの項目について，先行文献（友枝・鈴木編 2003）を参考に作成している。この項目と家庭生活尺度・規範意識尺度との間でクロス分析を行うのは，単に高校時代での経験や意識が，家庭での生活態度や「まじめ」意識の形成に影響を及ぼしているのかを検討するだけではない。旧来の「まじめ」の価値観を支えてきた学業＝地位達成志向は，向学校的な態度が影響を及ぼしてきたことを確認してきたが（大多和 2000，轟 2001 など），高校時代の生活意識によって学校適応の程度を測ることは，「まじめ」観の変容について検討できる側面もある。そこで，両尺度との間でクロス分析を行うことにより，学校への適応の程度から「完璧な子ども」図式の連関関係を検証するために分析を行う。

表6は，家庭生活尺度・規範意識尺度と高校時代の生活意識に関する項目とのクロス分析を行ったものである。家庭生活尺度については，有意性が見られない項目を除き，共通して，低位群→高位群に進

表 6　高校時代の生活意識に関する項目と家庭生活・規範意識尺度とのクロス分析

家庭生活尺度		低位群	中位群	高位群	合計	検定
授業に充足感があった	そう思わない	58(45.7)	226(33.5)	93(22.5)	377(31.0)	***
	そう思う	69(54.3)	449(66.5)	321(77.5)	839(69.0)	
授業をさぼったり，学校を休みたくなることがあった	そう思わない	58(46.0)	321(47.4)	240(58.0)	619(50.8)	**
	そう思う	68(54.0)	356(52.6)	174(42.0)	598(49.1)	
他の学校へ転校したいと思うことがあった	そう思わない	102(81.0)	583(86.2)	356(86.0)	1041(85.6)	*n.s.*
	そう思う	24(19.0)	93(13.8)	58(14.0)	175(14.4)	
学校の中にいるよりも，学校の外での生活のほうが楽しい	そう思わない	83(66.4)	461(68.3)	312(75.2)	856(70.5)	*
	そう思う	42(33.6)	214(31.7)	103(24.8)	359(29.5)	
成績や進路（大学進学）について，親や先生の期待を重く感じた	そう思わない	70(55.6)	427(63.0)	231(55.8)	728(59.8)	*
	そう思う	56(44.4)	251(37.0)	183(44.2)	490(40.2)	
クラスでの先生との関係はふだん，気軽に話ができる関係だった	そう思わない	35(27.8)	132(19.5)	56(13.6)	223(18.4)	**
	そう思う	91(72.2)	544(80.5)	356(86.4)	991(81.6)	
一般的にいえば，先生には敬意を払うべきだと考えていた	そう思わない	36(28.6)	117(17.3)	43(10.4)	196(16.2)	***
	そう思う	90(71.4)	558(82.7)	369(89.6)	1017(83.8)	
授業や学習で得た知識はいずれ仕事や社会の役に立つと思っていた	そう思わない	73(57.9)	335(49.8)	133(32.4)	541(44.7)	***
	そう思う	53(42.1)	338(50.2)	278(67.6)	669(55.3)	
テストでは途中の考え方より，答えがあっていたかどうかが気になった	そう思わない	54(42.9)	290(42.9)	170(41.3)	514(42.3)	*n.s.*
	そう思う	72(57.1)	386(57.1)	242(58.7)	700(57.7)	
成績が良ければ仲間や友人から尊敬されることがあった	そう思わない	56(44.4)	263(39.0)	132(32.1)	451(37.2)	*
	そう思う	70(55.6)	412(61.0)	279(67.9)	761(62.8)	

規範意識尺度		低位群	中位群	高位群	合計	検定
授業に充足感があった	そう思わない	34(45.9)	261(34.3)	83(22.4)	378(31.4)	***
	そう思う	40(54.1)	499(65.7)	287(77.6)	826(68.6)	
授業をさぼったり，学校を休みたくなることがあった	そう思わない	36(48.0)	371(48.8)	203(54.9)	610(50.6)	*n.s.*
	そう思う	39(52.0)	389(51.2)	167(45.1)	595(49.4)	
他の学校へ転校したいと思うことがあった	そう思わない	54(72.0)	642(84.5)	333(90.2)	1029(85.5)	***
	そう思う	21(28.0)	118(15.5)	36(9.8)	175(14.5)	
学校の中にいるよりも，学校の外での生活のほうが楽しい	そう思わない	47(63.5)	508(66.8)	289(78.3)	844(70.2)	***
	そう思う	27(36.5)	252(33.2)	80(21.7)	359(29.8)	
成績や進路（大学進学）について，親や先生の期待を重く感じた	そう思わない	46(61.3)	462(60.7)	213(57.6)	721(59.8)	*n.s.*
	そう思う	29(38.7)	299(39.3)	157(42.4)	485(40.2)	
クラスでの先生との関係はふだん，気軽に話ができる関係だった	そう思わない	14(18.7)	152(20.1)	58(15.6)	224(18.6)	*n.s.*
	そう思う	61(81.3)	606(79.9)	313(84.4)	980(81.4)	
一般的にいえば，先生には敬意を払うべきだと考えていた	そう思わない	29(38.7)	134(17.7)	34(9.2)	197(16.4)	***
	そう思う	46(61.3)	624(82.3)	337(90.8)	1007(83.6)	
授業や学習で得た知識はいずれ仕事や社会の役に立つと思っていた	そう思わない	41(55.4)	377(49.8)	118(32.0)	536(44.7)	***
	そう思う	33(44.6)	380(50.2)	251(68.0)	664(55.3)	
テストでは途中の考え方より，答えがあっていたかどうかが気になった	そう思わない	36(48.0)	302(39.8)	170(45.8)	508(42.2)	+
	そう思う	39(52.0)	456(60.2)	201(54.2)	696(57.8)	
成績が良ければ仲間や友人から尊敬されることがあった	そう思わない	39(52.0)	287(38.0)	119(32.1)	445(37.0)	**
	そう思う	36(48.0)	469(62.0)	252(67.9)	757(63.0)	

注）1. 各表の単位：括弧内の数字は%，括弧外の数字は回答人数（人）を表す。2. 検定については以下のとおり。***$p<0.001$　**$p<0.01$　*$p<0.05$　+$p<0.1$　*n.s.*　no significant。3. 表 6 で使われている高校時代の生活意識項目のうち，「そう思う」は「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」回答者の合計であり，「そう思わない」は「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」回答者の合計である。

むに従い，「授業をさぼったり，学校を休みたくなることがあった」「学校の中にいるよりも，学校の外での生活のほうが楽しい」のように，反（脱）学校的態度を問う項目では「そう思う」と回答した人が減少する代わりに，「そう思わない」と回答した人が増加した一方，それ以外の教師―生徒関係や向学校的態度を問う項目については，「そう思う」と回答した人が増加し，「そう思わない」と回答した人が減少した。一方規範意識尺度については，各群で回答分布が近い値をとる統計的有意性のない項目数が増加するものの，それ以外については家庭生活尺度のデータと回答傾向は同じであった。

このことから，高校時代の生活意識に関する項目と家庭生活・規範意識尺度との間で次のような関係が考えられる。全体的に見れば，回答者はおおむね向学校的な態度を持っていた人が多い上に，低位群→高位群に移行するに従い，家族との仲の良さの程度と規範意識が高まるという事で，従来の知見を確認する結果となった。この点に関していえば，大学生の「まじめ」さは，高校時代の向学校的な態度に裏打ちされた形で成立していることが確認できた。ただ，「成績や進路（大学進学）について，親や先生の期待を重く感じた」「テストでは途中の考え方より，答えがあっていたかどうかが気になった」のように，学業＝地位達成志向を問う項目の一部に，統計的有意性がない（もしくは比較的弱い）上に，回答傾向が分散する傾向が見られていることは注目すべき点である。この回答傾向は学業＝地位達成志向の揺らぎと断定するにはまだ検討の余地があるものの，少なくとも本稿での結果から，勉強の勤勉さや良い成績をとることなどに対する意欲が低下している傾向から判断すれば，回答者自らが業績主義的競争の自明性の喪失を認識し始めていることの証左であるといえる。この傾向は受験競争の緩和や積極的なゆとり教育政策の実施を背景に，「居心地の良い学校」を目指す「学校のコンサマトリー化」が背景にあると考えられる。ただし受験競争の緩和は学習への有意味性の喪失を意味せず，逆に多様な入試制度の実施を背景に，成績や学力に左右されない形で受験競争を勝ち抜くという傾向にシフトし，それが結果的に学校への適応と調和する形になったと考えるべきである。

5. おわりに

以上のように，家庭へのコミットメントの程度をもとにして「まじめ」な学習態度をとる大学生に潜む行動戦略について分析を試みてきたが，全体的にいえば「大学生の生徒化」は，家庭（良い子）→学校（良い生徒）→大学生活（まじめな学生）へと連なる「完璧な子ども」図式の延長線上に位置していることを確認する結果となった。「これまで大学生の特権であったと思われる自由な時間が奪われ，中学・高校並みの生活管理（「生徒化」）を内面化させられている」（浜島 2006: 219）ことは，大学生を大人として扱わず，「子ども」であることを当然とする機運が，社会全体の中で合意 (consensus) を得られていることにつながっている。それは大学生自身が，自分のことを学生と呼ばず「生徒」と名乗る傾向に関係している。つまり，受験競争の緩和に代表されるような，学業＝地位達成志向の揺らぎが結果的に学校への適応を促し，「まじめ」な学生の増加に貢献しているといえよう。

ただ，本稿の分析で表れているように，回答者の学業＝地位達成志向に関する受け止め方が，「勤勉や努力を積み重ねる」ことよりも，「自分自身にいい感じを持つ」形で進んでいることに留意する必要がある。学校への適応は単に「まじめ」でいるための基準として機能しており，時と場合に応じて自分の性格や態度を切り替えることを戦略として行っている。それは，旧来の「まじめ」の価値観の崩壊を意味するのではなく，アルバイトなどの学校外の活動や，インターネット・携帯電話のようなパーソナルメディアで取り交わされる人間関係を含めて，多様な価値観を反映する形で「まじめ」の価値観の再構築

が進んでいるといえよう。大学生が，高学歴化の進行に伴う学習期間の長期化により，「学校が与え，課すものを依存的，他律的にこなす」存在であるから，「生徒化」しているというのであれば，今後は学習期間の長期化が「生徒化」を機能的に進める要因について検討する必要があるだろう。

注

1) 堀(2000)はパーソンズの議論から，近代社会は〈業績に基づいた諸資源の分配構造〉が規範的秩序となっている社会，つまり業績に基づく差異的分配が規範化・正当化された社会であると述べている。堀が業績主義に注目するのは，高校生を業績主義的競争から緩和・忌避する流れができつつあるのに対し，近年の日本社会の趨勢が「自己責任」や「新自由主義」に代表されるように，業績の差異的分配構造の相対的な平準性が危機にさらされ，人々がそのことを認識視せずにいることによるという。つまり，業績主義に基づく規範的秩序そのものの存在意義が問われている一方で，その業績主義原理のあり方を超える要因（社会階層や親の経済状況など）が台頭して，努力や学習意欲は社会の現実をそのまま受け入れてしだいに低下していること（苅谷 2001）をある程度強調している。
2) トラッキングは次のような効果を及ぼすものとして，一般的に理解されているとしている。上位ランク校の生徒は学校生活や入試競争に対して同調的で，勤勉型の学校文化を形成する傾向があるのに対して，下位ランク校の生徒は「反」学校的，あるいは「脱」学校的な学校文化を形成し，自発的に地位達成志向をはやばやと自発的に放棄してしまう傾向がある。そして，生徒の側のそのような「先を見越した社会化」の主観的帰結として，現実の学校格差構造が補強，再生産されていく傾向がある（室井・田中 2003: 72)。
3) 本田が扱った調査は，対象者は小学 5 年生と中学 2 年生であることから，「若者」のカテゴリーとしてはある程度考慮できるが，「学生」ではない点で，ここでの知見は本稿の研究枠組を理解する手がかりとして扱っている。
4) 大学ランキング編集部編(2005)によれば，A 大学の平均偏差値は 53，B 大学は 62，C 大学は 65 であり，いずれの大学も首都圏内に所在地がある。各大学の回答総数及び実施科目数については，A 大学は 6 コマ 514 人，B 大学は 3 コマ 450 人，C 大学は 3 コマ 271 人であり，回答者の属性は付録 I のとおりである。なお，調査対象者を教職課程履修者とした理由は，調査時に協力して下さった先生方の授業がすべて教員免許状に関係する授業であったことによる。ただし，特に「まじめ」な学生だけを結果的に対象としてしまったとは考えにくい。なぜなら，3 大学で行われた実査は，卒業単位への可否等の理由で，制度的属性の異なる形で実施されているからである。また同様の条件で行った先行研究も存在する。したがって，同じ教職関係の授業であっても，大学生の授業に対する位置づけが異なるので，分析の知見は大学生全般にある程度反映されうると考える。
5) この点に関しては，他の回答属性が「まじめ」観の形成に影響を与えている可能性を検討するため，規範意識尺度と家庭生活尺度の二つを「まじめ」尺度として構成させてクロス分析を行った。結果としては，性差以外の項目（大学偏差値，国立/私立，理系/文系の学部差）は統計的有意性がない，すなわち回答者の属性が回答に影響を与えていないことが確認できた。また性差については両尺度共に，低位群→高位群に移行するに従い，中位群が一番多く回答が分布する一方，高位群になると急減する傾向が男女ともに見られた（付録 II)。この結果，回答属性が「まじめ」観の形成にあまり影響を与えないことが判明したが，今後は回答属性が影響を与えない要因について検討する必要があると思われる。
6) 質問項目の平準化を行うために，「そう思う」「抵抗がある」に 4 点，「まあそう思う」「ある程度抵抗がある」に 3 点，「あまり思わない」「あまり抵抗がない」に 2 点，「そう思わない」「抵抗がない」に 1 点を与えて足した。また分類を行うに当り，度数分布表の分散と平均値を参考に行った。家庭生活尺度は平均値が 12.08 であることから，4～8 点を低位群，9～13 点を中位群，14～16 点を高位群とし，12 点を中心に据えた。
規範意識尺度の平均値は 19.62 であり，6～14 点を低位群，15～21 点を中位群，22～24 点を高位群として 20 点を中心に据えた。また，尺度の信頼性を表すクロンバックの α は，家庭生活尺度が .765，規範意識尺度は .650 と，一般的に尺度の信頼性が認められる水準を十分確保している。
7) 学校のコンサマトリー化とは，伊藤(2002)によれば，生徒個々人のありのままを尊重し，より現在志向の強い「心地良い学校」に変えていこうとする現象をいう。「ゆとり教育」以前の学校は，「将来のため」という論理の元に生徒への指導を通して，特定の方向に向けようとしてきた。「ゆとり教育」が進んだ 90 年代以降は，生活の広い範囲において行われた校則や生徒指導などを縮減し，生徒を管理する傾向を弱めて学校内での人間関係

や「居心地の良さ」を重視するようになった。学校のコンサマトリー化が進行した背景については，教育改革の潮流で公教育の自由化路線が高まったこと，いじめや不登校などの教育問題に対処するためにまず心理面の安定を学級集団に確保しようという教育現場の要望が挙げられる。

参考文献

大学ランキング編集部編　2005 『大学ランキング　2006年度版』朝日新聞社.

浜島幸司　2006 「若者の道徳意識は衰退したか」浅野智彦編『検証・若者の変貌』勁草書房 pp. 191-229.

広田照幸　1999 『日本人のしつけは衰退したか』講談社.

本田由紀　2005 『多元化する能力と日本社会』NTT出版.

堀　健志　2000 「学業へのコミットメント」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 pp. 165-184.

伊藤茂樹　1999 「大学生は「生徒」なのか」『駒澤大学教育学研究論集』**15**: 85-111.

――――　2002 「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』**70**: 55-74.

苅谷剛彦　2001 『階層化日本と教育危機』有信堂高文社.

苅谷剛彦・志水宏吉編　2004 『学力の社会学』岩波書店.

片瀬一男編　2001 『教育と社会に対する高校生の意識―第4次調査報告書』東北大学教育文化研究会.

――――　2005 『夢の行方』東北大学出版会.

小杉礼子　2003 『フリーターという生き方』勁草書房.

工藤保則　2001 「高校生の相談ネットワーク」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 pp. 159-182.

耳塚寛明　1980 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』**35**: 111-122.

宮台真司・藤井誠二・内藤朝雄　2002 『学校から自由になる日』雲母書房.

溝上慎一　2001 『大学生の自己と生き方』ナカニシヤ出版.

――――　2004 『現代大学生論』日本放送出版協会.

室井謙二・田中　朗　2003 「高校生の学歴＝地位達成志向」友枝敏雄・鈴木譲編『現代高校生の規範意識』九州大学出版会 pp. 69-102.

中西泰子　2004 「友達母娘のなにがわるい？」宮台真司・鈴木弘輝編『21世紀の現実』ミネルヴァ書房 pp. 53-73.

尾嶋史章編　2001 『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房.

大多和直樹　2000 「生徒文化―学校適応」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 pp. 185-213.

千石　保　2000 『「普通の子」が壊れてゆく』日本放送出版協会.

轟　亮　2001 「職業観と学校生活感」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 pp. 129-158.

友枝敏雄・鈴木　譲編　2003 『現代高校生の規範意識』九州大学出版会.

渡辺秀樹　1989 「家族の変容と社会化論再考」『教育社会学研究』**44**: 28-49.

付録 I 回答者の属性

大学名	男女別			学年分布					
	男性	女性	NA	1 年	2 年	3 年	4 年	その他	NA
A 大学（私立）	348	142	24	313	159	11	4	3	23
B 大学（国立）	222	208	20	246	152	27	3	0	22
C 大学（私立）	181	67	23	186	50	4	4	1	26
総計	751	417	67	745	361	42	11	4	71

注）NA＝no answer（回答なし）

付録 II 性差による「まじめ」度の違い（両尺度とも p=.000）

	家庭生活尺度		合計	規範意識尺度		合計
	男	女		男	女	
低位群	90(12.1)	29(7.0)	119	50(6.8)	17(4.2)	67
中位群	446(60.1)	194(46.9)	640	490(66.4)	230(56.2)	720
高位群	206(27.8)	191(46.1)	397	198(26.8)	162(39.6)	360
合計	742(100)	414(100)	1156	738(100)	409(100)	1147

注）カッコ内 (%) は回答人数÷各尺度の男女別の合計回答人数×100 により算出